

帝都鳴動Ⅲ

三木原慧一

Keiichi Mikihara

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

帝都鳴動Ⅲ 目次

プロローグ	ザ・ステイニング	11
第一章	バベル	26
第二章	悪党に肅清を	54
第三章	想定ナンバー六七七	81
第四章	指揮権移譲	107
第五章	恐れ多き目標	128
第六章	蘇るクラウゼヴィッツ	151
第七章	暗号名38PMW	185

第八章 喪服の魔女

第九章 軍人精神

第一〇章 決着

エピソード ある日、どこかで

314 276 256 217



東京市地図 (大正12年9月1日現在)



地図 安達裕草

帝都鳴動Ⅲ

プロローグ ザ・ステイング

東京警視庁が置かれた日比谷赤煉瓦庁舎の住所は、東京府東京市麹町区有楽町二丁目。二二世紀では、DNタワー21ビルとなり、近代的な佇まいを見せている。

一九二三年（大正一二二年）九月一日の今日、警視庁は瓦礫の山と化した。赤色戦線戦士同盟幹部剛力毅が爆薬を積んだトラックで自爆攻撃を敢行、これを粉砕したのだ。

一〇トン余に達するダイナマイトの爆発威力は凄まじく、三階建て庁舎は完全に崩壊した。炎の塊と共に庁舎が崩落、路面は爆風と黒煙、激しい土煙に満ちていた。

爆発を見届けた赤色戦線戦士同盟の男たちも無事では済まない。崩れた赤煉瓦の破片が榴弾のように周囲に降り注ぎ、頭部を直撃された隊員がこと切れる。フォードの破片に右腕を切り裂かれ、絶叫しつつ転げ回っている者の姿。一抱えもある扉の破片に潰され、無残な骸を曝す者たち。地獄絵図だ。

だが、帝国劇場の延焼はびたりと止んでいた。警視庁を基点に生じた巨大な爆風が、劇場を包む火焰の大半を吹き消したのだ。油田火災におけるダイナマイトを使った爆破消防と同じ原理である。

一方、警視庁は惨憺たる有様だ。優美を誇った三階建て赤煉瓦庁舎の面影はどこに

もない。玄関上部のアーチは崩れ、見張り台も瓦礫の山に埋もれ、第二次大戦時の大型爆弾直撃を思わせる惨状を曝している。

岩崎邸を借り受けた関東防災総司令部では、隊員が事前に設置したムービーカメラによって、警視庁爆発の瞬間からその後までが液晶4Kモニターに余すことなく実況されていた。

警視庁玄関にフォード製一〇トントラックが突入、突き出たボンネットが扉を突き破った。車体がめりこむようにホール内部に吸いこまれ、次の瞬間、発光現象が生じた。

高速撮影時を思わせるスピードで窓という窓から一斉にガラス片が噴出、アーチ状に作られた玄関上部が崩落し、橙色の炎がモニター全面に拡大する。

カメラが若干ズームアウトした時には、爆発の最終プロセスも終焉しゆうえんに向かっていた。

黒煙と白煙が交差し、核爆発を思わせる不気味な

キノコ雲が立ち上っていく様が映し出される。

高野徹也たかのてつや一等陸尉は立ち上がった。鋭い目つきでモニターを見つめ、スイッチを入れた。

スピーカーから傍受班がモニターする波長の空電音が流れ始める。

55インチ液晶4Kモニターに、摺座かくざ横転した消防ポンプ車の姿が至る所で確認された。

「太内おとうち、これがおまえの願った結末だ」

応えるように無線が入った。はつきりと聞こえる。

「同志なだりかむ緑川、どうなった」

松園二尉まつぞのがストップウォッチのスイッチを入れた。デジタル・カウンターが回り始める。高野は受話器を握った。

「朝比奈大尉あさひな、どうだ」

岩崎邸から約三キロ東にある国技館の気象情報管制予知センターでは、朝比奈祐司大尉あさひなが自ら最新鋭逆探、電波探知機二型「E2A受信機」を操作して

いた。

ブラウン管に走る波形変化を見つめ、傍受アンテナを最適感度に向ける。

国技館につめる各種担当も遠巻きに朝比奈を見つめる。今この瞬間、敵テロリスト位置特定、捕縛、あるいは殲滅がかかっていると誰もが知っていた。

デジタル時計のカウントは三秒を過ぎた。太内の声流れ始める。

『何が起きた、同志緑川。応答しろ』

『爆発です。同志剛力が』

『やったのか』

『やりました。同志はトラックごと警視庁に突入、

自爆しました』

『そうか』

一〇秒。いいぞ。まだ送信スイッチを入れている。

雑音がバックノイズが聞こえる。

そのまま押し続ける、太内。

あと数秒で決まる。

逆探は成立する。

それがおまえの最後だ。

飛行船シエナンドーの操縦キャビンを、奇妙な沈黙が支配する。

八三式無線電信電話装置から聞こえる日本語音声に緊迫が漂う。時計員が達した。

『五秒経過』

交信はまだ続く。日本語の内容を理解するのはグルーバーと魚住惣司^{うおすみそうじ}三等海佐のみ。それでも交信継続は判る。

『一〇秒経過』

司令官を始め、幹部たちが顔を見合わせる。

通信長の緊張は傍目にも明らかだ。

命令書開封後、急遽^{きゅうきょ}キャビンに呼び寄せられた通信長の驚きと葛藤は爆発寸前だった。片方の手が艦内通話機にそえられ今にもスイッチを弾きそうだ。

『一五秒経過』

時計員の声。緊張が一気に高まる。
想定される最短逆探可能時間は二〇秒だ。

「あと五秒」

上野動物公園では、三浦知教少尉率いる第三分隊がレシーバーをかけ、検流計の針を睨んでいた。担当がストップウォッチを見つめている。

不意に三浦は瞬いた。

小枝が折れる音。

先刻も聞き、調べたが何もなかった。空耳だ。

馬鹿な。集中しろ。まもなく探知結果が出る。

先任曹長が口を開いた。

「出ました、少尉殿。敵の発信位置は」

「発信位置は」

葛飾郡新小岩の河川敷では、相田宏一少尉率いる第七分隊が任務を遂行中だ。

彼らの前に老夫妻が腰を下ろしていた。

正確には、リヤカーの荷台に老婆がうずくまり、老人が困ったようにそれを眺めている。

不測の事態に備えるべく、相田は夫妻をこの場に留め、警衛を立てた。さすがにSIGベルグマンを直接向けはしないが、いつでも発砲可能だ。誰何したところ、二人は葛飾から逃げてきた被災民で、脚が悪い婆さんをリヤカーで運ぶ途中だと言う。それでも警戒を怠らぬ。あと数秒で敵位置が判明、特殊部隊を送りこむことで一連のテロ事案は収束するのだから。

先任曹長が探知方位を読み上げる。

三浦少尉は炸裂音を聞いた。

続いて激しい衝撃を胸部に感じる。

視線を下げた彼は一驚した。

胸部一面が赤いもので濡れていた。

何だ、これ。

再び衝撃。三浦の意識は途切れつつあった。

ぼやける視野。再び鈍い銃声と共に部下たちが次々と胸部を撃ち抜かれる様が垣間見えた。

三浦の視野は急激に閉ざされた。意識が漆黒の闇へ墜ちていく。

いきなり撃たれた。

四五・五口径、一一・五六ミリ拳銃弾の轟音。

相田少尉は愕然とした。

胸部に銃弾を喰らった部下が次々と倒れ、撃ち返す前にさらに弾を浴びる。

老夫妻の両手にはそろって英国製ウエブリーW Gが握られていた。前世紀、一八八〇年度発表の英国製中折れ式回転弾倉式拳銃だ。

眼鏡の年寄り二人組が引き金を絞り、連射を続ける。約半世紀前、職人のハンドメイドで丁寧に作られた精度高い拳銃。無煙火薬の香り。橙色の炎を発生する銃口。一八グラムの弾丸が秒速一八〇メートルで放たれ、人体に食いこむ。炸裂する。

炸裂。

穿孔弾だ。

英語で言うホローポイント弾。

弾頭の先端に孔を持ち、人体に命中すると抗力から弾頭がキノコ状に開き、弾速エネルギーの大半を人体にぶつける。野生動物に対する狩猟用に開発され、その残酷性からジュネーブ条約で軍事目的での使用は全面禁止となった。四五・五口径では確か一八九八年にMk3マンストッパーとしてホロー・ポイントが出たが、翌年には軍から残らず引き上げられたはず。

禁制の弾丸を使う民間人。

つまり、それは。薄れゆく意識の中、相田は眼鏡の端に老夫妻を捉える。

心臓が鼓動を止める寸前、再び銃声が響いた。

最後に残った相田少尉の頭部を撃ち終えた老婆は、微かな笑みを浮かべた。

「これでよいか、同志サンニコフ」

「大変良いね、同志オルガ」

上野動物公園では、キリン担当飼育員、神原君人かんげんのみことが、コルトの弾倉交換を終えていた。

四五口径ACP弾を使う自動拳銃に神原は弾頭重量一・九八グラムのホロー・ポイント弾を装填、ピン入りコーラほどの減音器サブレッサを組み合わせ、三浦少尉以下、第三逆探班員に銃弾を浴びせた。

「油断は禁物」

神原はつぶやきつつ、まだ息がある部下たちにとどめを刺していく。

高周波音の抑制された四五口径ACP弾のくぐもった銃声が続く、最後に三浦に銃口が向けられる。

三浦が握る送受話器から明らかな混乱が伝わって来た。厳しい口調の反復呼びかけ、バックノイズもだ。

悪魔の微笑みを浮かべた神原は、引き金を絞った。

葛飾郡新小岩の河川敷では、オルガとサンニコフが後始末に入っていた。

彼らは秘密暗殺者だ。元はアムール河と流域に住むツングースの狩猟民で、ロシア内戦時赤軍に協力、以後、徹底した日本語特訓を施され、密かに送りこまれた。コミンテルンが誇る極東の切り札である。

リヤカーの荷台からオルガは素早く身を起こした。顔に施した変装を解く。ラテックス、ドーラン、口中に含んだ綿、巧みなメーキャップを瞬く間にリセットした。老婆が三〇代の女に蘇っていく。

サンニコフも変装を解いた。やがて、狐目をした四〇代の壮年男が姿を現す。

二人は遺留品と衣類を目の前の河に捨て、シルクのワイシャツとブラウスを纏った。その間にも無線機から呼びかけが続く。

関東防災総司令部では、一同が啞然とスピーカーを見つめていた。

そこから他ならぬ太内光巖みつよしの声が響いている。

『という訳だ。逆探知のクライマックスをご堪能いただけたかな、同志諸兄』

相手の挑発にも高野は固い表情を崩さなかった。

無線送受話器に向け、応じる。

「太内光巖だな」

『そうだ。私が太内光巖だ、高野君』

「おまえはこの周波数を知っている。なぜだ」

『我々も無線傍受と監視を実施している。残念だな。残りの手駒では、逆探平均時間は三五秒だ』

「剛力をどう見る」

『革命のための尊い犠牲だが、それだけだ。私の意志は北極星のように不動だ。動揺などしない』

「この交信も傍受、逆探していると思わないのか」

『傍受別班に命令を出した兆候はない。今から命じても手遅れ。さらばだ』

無線が切れる。高野は傍らの無線をつかんだ。

「魚住、どうだ」

『捉えた。発信方位二一四』

ブザー音。スピーカーから朝比奈大尉の声が響く。

『国技館の探知結果、真方位三三三』

「松園君」

「出ました。奴らの発信源は」

液晶4Kモニターに東京市の地図データ、飛行船と国技館の位置、そこから伸びる逆探方位がディスプレイされた。

赤色線が見る間に伸び、一点で交差した瞬間、室内がどよめいた。

「目標、座標4378、3914」

「馬鹿な」

「りょううんかく凌雲閣だと」

凌雲閣は明治二三年（一八九〇年）に建造された高さ五〇メートル、煉瓦造り一二階建ての高層建造物だ。

「凌雲閣も地震の被害を受けているはずだ」

「八階から上が崩壊しています」

「それでも奴らにはいる。恐らく無傷の区画を占拠、

戦闘員を各所に配備済みだ」

高野は無線を取った。

「プロメテウス総員、目標は凌雲閣だ。総員、出撃。
太内光巖を確保、拘束しろ」

「なぜ探知された、なぜ」

凌雲閣ではモスクワから派遣された監察官の奥田おくだ樹たが表情を引きつらせていた。

関東防災総司令部を監視する赤色細胞、敵信傍受班の緊急報告が奥田を恐慌に陥れる。

「どうしてなんだ」

ほんの僅か前、奥田樹は得意の絶頂にあった。

剛力の突入に動揺する太内を厳しく叱責。

ツングースの暗殺ペアと神原君人に敵逆探班の殺害を実施させ、いずれも成功した。二組とも優れた

暗殺者で、モスクワからも一目置かれている。彼らを使った敵逆探班の抹殺は、奥田が決めた究極のカウンターであった。

敵は徹底した攻撃で剛力を追い詰め、自爆テロ攻撃を執行させた。警視庁は大爆発で崩壊。その瞬間、剛力と深い繋がりを持つ太内は錯乱、無線は垂れ流しとなり、敵は逆探に成功する。

着眼点は良い。誉めてやる。

実際、モスクワから私が来なかつたら危なかつた。足元に横たわる公子きみこがその証だ。剛力突入寸前の公子は『剛力兄様』と絶叫、送話器を奪い取ろうとした。

それを腹部の一撃で昏倒させ、床に叩きつけた。

言葉を失う太内に『同志、あくまで任務を遂行するのだ』と冷たく突き放す。相手が絶対に反論できない状況で正論をもって己の意志を強要した。

幸い、太内も任務を再認識したようだ。立ち直り、剛力を喪った怒りを淡々と無線で敵にぶつけ、交信

を断つた。勝利は我にあり。警視庁を爆破され、精鋭逆探班を喪つた敵は再起不能に陥つた。

ところが再度逆転。

敵の逆探が成立した。だが、いつ、どこで。

「何が起きたんだ」

「知りたいですか、同志」

不意に声が響く。

奥田は血走つた眼を向けた。目の前に少年が立っていた。高山良和だ。たかやまよしかずモスクワから派遣された、たかが記録係。不作法な奴がこの俺に『知りたいですか』だと。

怒りを堪えつつ、奥田は訊ねた。「訳を知っているのか、貴様。教えろ」

「ええ。我々を探知したのは」

高山はさながらレーニン像を思わせるポーズ、左手はコートに、右手を三七度の角度で伸ばし、人差し指を突き出す。未来に向けたポーズを巧みに再現し、声を張り上げた。

「あいつです、同志」

高山は空の一点を指さした。

黒点ほどの大きさがたちまち一円玉ほどの大きさになる。

奥田の目が見開かれた。

「あれは」

飛行船シエンンドーの操縦キャビンでは、魚住たちが不敵な笑みと共に前方を見つめていた。

双眼鏡には、上層が崩落した凌雲閣の無残な姿がはつきりと映っている。見張員の声が続く。

「目標を視認」

「数は三名、いや、四名。各階に武装した敵兵を確認しました」

双眼鏡を降ろしたフランク・ロバート・マクラリ艦長は達した。

「副長、全銃眼にライフル装備の武装兵を配備。砲術長、機銃の用意はどうか」

「できています。本艦の装備、ルイス機銃六挺でいつでも交戦可能です」

「よろしい。ただし、敵が撃つまでは絶対に撃つな。必ず先に撃たせるんだ」

艦長は傍らに立つ法務官のベックマン中尉を見た。

「なにか問題があるかな、ミスター・ベックマン」

「いいえ。完璧な対応です」

マクラリーは内心で胸をなで下ろしていた。先刻の命令書開封は、司令官を激しい葛藤から救う待ち望んでいたものであった。

そつとモフェット司令官の横顔を見つめる。視線が交差した。思いは同じだ。

ウイリアム・アジャー・モフェット司令官の脳裏に先刻の記憶が蘇る。

『これより封緘命令書を開く』

司令官自らが命令書を開封、艦長とハルゼー中佐が覗きこむ。一拍の間合いを経て、ハルゼーがつぶ

やくように言った。

『こいつは魂消た』

『司令官、これは大統領からの直接命令です』

予想はついていた。

大統領と海軍上層部は、飛行船シエナンドーの日本派遣を巡り対立した。搭載する最新の電子装備が原因だ。話し合いの結果、電子装備を使わぬことで折り合いがついたが、それは大統領の本意ではなかった。

出発直前、モフェットはルーズベルト元海軍次官から封緘命令書を受け取った。暗号電の受信後、開封せよと命じられたのだ。

暗号電は来た。ただちに法務官が呼ばれ、封書が開封される。

『人命救助と機密保持規定、その両立が不可能と判断した時は、モフェット司令官に全権を委ねる。』

第三〇代合衆国大統領 カルビン・クーリッジ
これぞ待ち望む命令だ。モフェットは告げた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。